

## ● 経常研究（農政部事業）

## ながいもの乾物率向上に向けた栽培法

平成20～22年（3年間）

十勝農業試験場

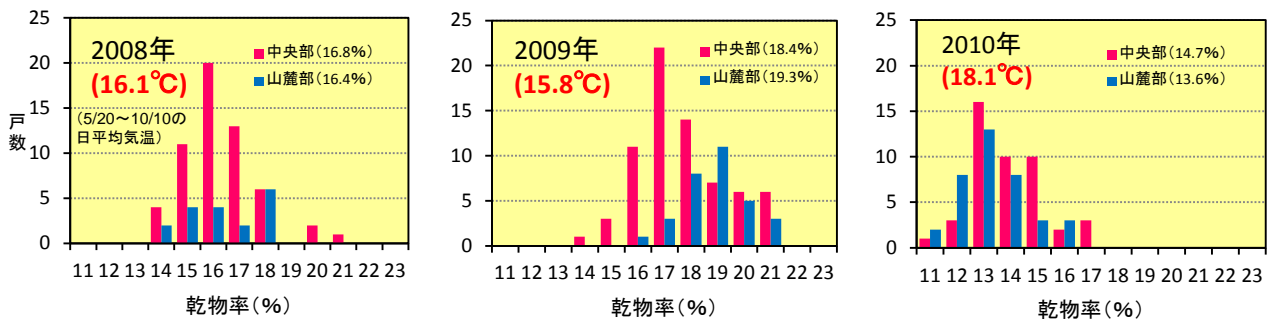
共同（協力）機関（北海道 十勝総合振興局 十勝農業改良普及センター）

## Abstract 概要

十勝の名産であるながいもでは、乾物率が低いことに起因する貯蔵性の悪化や食味の低下が問題となる場面が散見されました。そこで、乾物率の実態と改善対策について検討しました。その結果、特に低乾物率となりやすい地域、生産者において、ながいもの規格内収量の確保+乾物率の安定的向上を図るためには、①大きい種いもの利用と密植の組み合わせ、②植え付け遅れの回避、③マルチの活用、④窒素施肥（基肥10kg+7月末までの追肥10kg/10a）、が有効であることが明らかとなりました。

## Results 成果

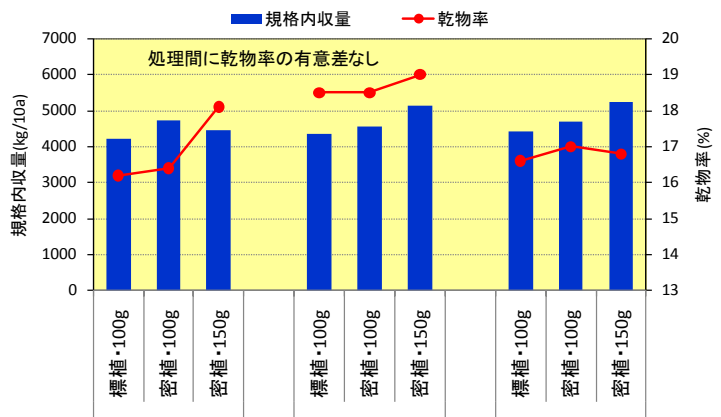
## 1 乾物率の現地実態



■各年とも乾物率の高低差は大きいものでした。十勝中央地域と比較して十勝山麓地域の年次変動は大きくなりました。また、3力年とも低乾物率の生産者が両地域に認められました。

## 2 栽培法（種いも重と栽植密度の影響）

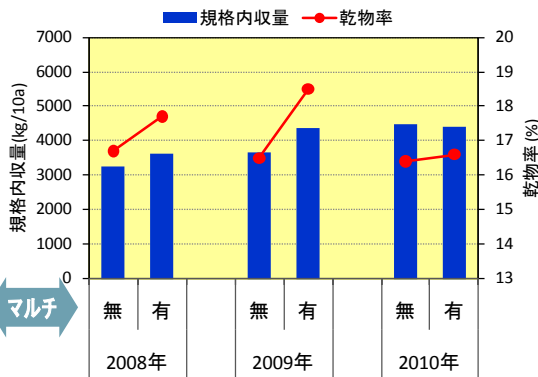
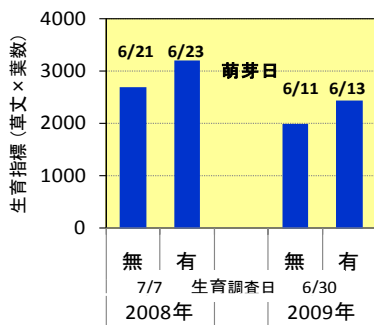
■種いも重を100gから150gにして密植（株間18cm×畝間90cm）すると、ながいもの収量性が高まりました。



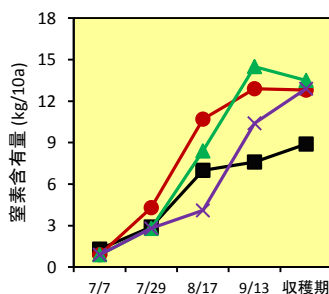
Results 成果

3 栽培法 (マルチの効果)

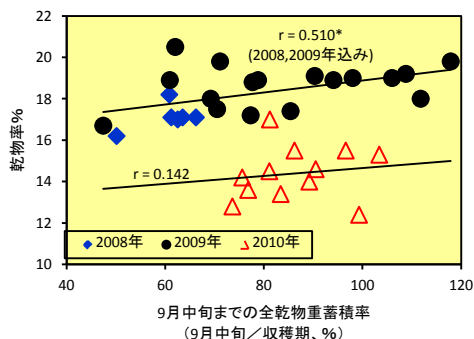
■マルチ栽培によって萌芽期が早まるなど初期生育が促進され、収量、乾物率とも高まります。



4 窒素分施肥法



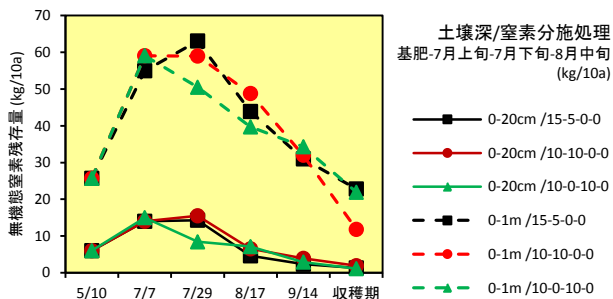
窒素分施肥  
基肥-7月上旬-7月下旬-8月中旬 (kg/10a)  
( )内は規格内反当収量kg/乾物率%  
異なる文字の処理間に有意差有 (p<0.05)



■ながいもは、7月下旬から9月中旬にかけて、急激に窒素を吸収します。つまりこの時期に十分量の窒素供給を行う必要があり、基肥だけで賅うことは非効率と考えられます。

■乾物率を向上させるには、9月中旬までに、ながいも体内(茎葉+根)に十分な乾物の蓄積を行っておくことが必要です。

■7月下旬に窒素追肥した場合、ながいもの急速な吸収利用で、表層20cmの土壤中無機態窒素量は減少します。9月中旬以降はその残存量は少なく、ながいもの乾物率上昇を妨げることはありません。



Activities 業績

【研究成果入手先】

道総研農業研究本部の「農業技術情報広場」で、本成果に関する概要(pdf)を公開。

<http://www.agri.hro.or.jp/center/kenkyuseika/iipan23.html>

北海道農業研究センターのHPで「平成22年度北海道農業研究成果情報」の項に掲載されています。

Dissemination 普及

■開発した技術は、平成22年度十勝圏農業新技術セミナー(H23.2.24)で発表(口頭、ポスター、要旨集)しました。

■本成果は、道内各地の農業改良普及センターを通じて生産者等への技術普及に移されています。

Contact 問い合わせ

農業研究本部 十勝農業試験場

研究部 生産環境グループ/地域技術グループ

【電話】 0155-62-9825

【メール】 tokachi-agri@hro.or.jp

【ウェブ】 <http://www.agri.hro.or.jp/tokachi>